

慶應義塾大学 文学部

3つのポリシー

【文学部人文社会学科（全体）】

卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

文学部（人文社会学科）は、本塾建学の精神に則り、哲学、史学、文学、図書館・情報学、人間関係学にかかわる理論と応用を研究教授し、文化の創造と社会の発展に資する幅広い教養と深い学識および知的・倫理的・実践的能力を有した人物を育成する。すなわち「文（ことば）」にかかわる広大な領域を対象として、創立者福澤諭吉の「実学の精神」に基づき、実証的に真理を解明し問題を解決してゆく科学的な姿勢と知識および能力を培うことをめざす。

そのために、以下に示す総合教育科目、必修語学科目および専門教育科目（各専攻）に関するそれぞれの方針のもとで、所定の要件を満たしたと認められる学生に対して、第2学年進級時に定められる所属専攻に応じて、学士（哲学）、学士（美学）、学士（史学）、学士（文学）、学士（図書館・情報学）、学士（人間関係学）のいずれかの学位を授与する。

学修の最終成果である卒業論文（卒業試験）は次の審査項目を満たすものとする。

1. テーマ・問題意識が明確である。
2. 先行研究を踏まえている。
3. 方法が目的に適っている。
4. 内容が論理的で一貫している。
5. 形式が学術論文として適切である。

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

文学部（人文社会学科）は、上記の卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を実施するために、総合教育科目、必修語学科目および専門教育科目から構成される教育課程（カリキュラム）を編成する。それぞれの科目（群）の編成・実施の方針は、以下に示すとおりである。

文学部の研究教育の対象は、人文学、社会科学に限定されるものではなく、自然科学や学際的な分野も包含する幅広さと多様性を特徴とする。したがって文学部の教育課程も多様な科目や分野によって編成される。特に総合教育科目、必修語学科目においては、学士課程での学びの軸となる幅広い見識、学習のための基礎的技能、着実な言語運用能力の形成をめざした科目編成や授業運営を実施する。また専門教育科目においては、所属する各専攻にかかわる基礎的な知識を基盤として、次第に高度な専門的学識や技能を習得することができるような体系的な教育課程を編成・実施する。さらに専攻外の専門教育科目等の履修も可能とし、学生が自ら定めた研究・学習課題をさまざまな授業科目や学習機会によって達成できるような教育課程を編成・実施する。

入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）

文学部では次のような資質・能力を有する学生を求めている。

- ・ 慶應義塾の精神に対する十分な理解、および学問に対する意欲と向上心
- ・ 先人による古典類から最新の研究成果が書かれた論文に至るまでの諸文献を読み込み、理解するための基礎となる語学力（日本語、および英語・フランス語・ドイツ語・中国語）
- ・ 与えられた課題に対して論理的に思考し、それに対する自分の考えを正確かつ十分に記述する能力
- ・ 現在の社会や文化の成り立ちを理解するための基礎となる歴史的な知識（日本史または世界史）

これらは、文学部が設置しているすべての専攻（哲学、倫理学、美学美術史学、日本史学、東洋史学、西洋史学、民族学考古学、国文学、中国文学、英米文学、独文学、仏文学、図書館・情報学、社会学、心理学、教育学、人間科学）に共通しており、入学後、それぞれの専攻における独自のカリキュラムに従って、専門的な知識や能力を身につけてゆく。したがって、文学部に入学する者は、これらの専攻が対象とするいずれかの学問に対する関心・好奇心を有することもまた必要である。

以上の方針に基づき、一般入試を実施する。さらに、この方針に沿いつつ、より多様な人材を入学させるための自主応募制による推薦入試（自己推薦入試）や、帰国生入試や留学生入試を行う。具体的には、一般入試は、外国語・地理歴史・小論文の三科目の試験による選抜であり、文学部にふさわしい高い学力を要求する。自主応募制による推薦入試は、高等学校で一定の評点に達していることを条件に、在学中の活動実践や社会的活動をも加味した総合的な考査によって選抜する。そのほか、帰国生入試と留学生入試では、学業成績と勉学意欲を勘案した選抜を行う。

- ※ 文学部の入学者選抜は、人文社会学科総体で実施している。したがって「入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）」は、以上の文学部総体の方針のみとなる。以下、総合教育科目および必修語学科目、さらに各専攻に関しては、「卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」および「教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）」のみを示す。

【総合教育科目および必修語学科目】

卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

文学部では、総合教育科目、必修語学科目および専門教育科目（各専攻）に関するそれぞれの方針のもとで、所定の要件を満たしたと認められる学生に対して、第 2 学年進級時に定められる所属専攻に応じて、学士（哲学）、学士（美学）、学士（史学）、学士（文学）、学士（図書館・情報学）、学士（人間関係学）のいずれかの学位を授与する。このうち、総合教育科目および必修語学科目にかかわる要件は、以下のとおりである。

1. 専門教育での学びに必要とされるレベルの外国語運用能力を習得していること。
2. 総合教育科目の学習を通じて、専門教育科目の学習の前提条件となる教養としての基礎力を身につけていること。具体的には、自ら問題を発見し、それを解決するためのアプローチを自発的に探求し、かつそのために必要な資料を収集・調査・分析してまとめ、それを議論や論証を通じて説得力あるアウトプットへと結実できるような、広い意味での問題発見・解決能力、情報処理能力、論理的能力を習得していること。
3. 幅広い教養を身につけることによって、第 2 学年以降に専門教育において学んだ学問領域を他の領域と関連付けることや自らの知識や思考を領域横断的に発展させるために必要な応用力を習得していること。

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

文学部では、①外国語運用能力、②専門教育の前提となる基礎力と応用力、の 2 点を習得させるために、必修語学科目および総合教育科目について、以下のような方針でカリキュラムを編成する。

1. 専門教育科目での学びに必要とされるレベルの外国語運用能力を身につけるために、1・2 年次において外国語科目を必修として課す。なお、学生が異文化を理解し、

自らの文化や国家の状況についての客観的な認識を深め、国際交流や活動において積極的に対応できる力を習得するため、さらには、文学部の専門教育の学問内容の特色の一つである多様な地域研究を行う能力を養うためにも、少なくとも 1 年間は 2 語種の外国語科目を履修することとする。

2. 幅広い教養を養うために、学則に定められた単位数以上の総合教育科目を履修するよう指導する。なお、人文科学、社会科学、自然科学の特定の分野に偏ることなく履修することを求める。
3. 文学部では 2 年進級時に専攻を選択することになるが、総合教育科目の中に、専攻の専門教育につながる内容を有する科目も設置することで、学生の専門領域に対する興味をより深められるようにする。また、特に 1 年次に集中して総合教育科目を学ぶことにより、幅広い教養と視野を養い、2 年進級時に専攻を選択するうえで必要となる、自らの興味や適性を見出すことをめざす。

【哲学専攻】

卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

哲学専攻は、所定の課程を修了し、以下の 4 要件を満たしたと認められる学生に、学士（哲学）の学位を授与する。

1. 古今の西洋哲学の文献を正確に理解できること。またそのために必要な語学力と論理的能力を身につけていること。
2. 口頭発表・ディスカッション・文章表現などにおいて説得力ある議論・論証ができるだけの論理的表現力を身につけていること。
3. 人間とそれを取り巻く世界、人間が形成してきた知識（諸科学）、信念体系、価値体系について、原理的かつ総合的な反省的思考をおこなうことができること。
4. 変転めまぐるしい現代社会の只中であっても、問題に対してつねに原理的かつ批判的な考察をくわえようとする合理的で自律的な思考主体・表現主体であると同時にいかなる問題に直面しても、時流に流されることなく、つねに普遍的な観点に立とうとする行為主体であること。

学習の最終成果である卒業論文（卒業試験）は次の審査項目を満たすものとする。

1. テーマ・問題意識が明確である
2. 先行研究を踏まえている
3. 方法が目的に適っている

4. 内容が論理的で一貫している
5. 形式が学術論文として適切である

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

哲学専攻では、①哲学文献を正確に読解できる語学力、②哲学の歴史と多様な諸分野についての総合的な知識、③個別の専門分野に対する深く正確な理解を身につけさせ、④それらの着実な基礎のうえに独創的な哲学研究を卒業論文として結実させるべく、以下のような方針でカリキュラムを編成する。

1. 2年次の必修科目として、ドイツ語ないしフランス語の「哲学倫理学原典講読」を設置し、より専門的な選択必修科目として、「哲学原典研究」をそれぞれドイツ語・英語・フランス語・ギリシア語・ラテン語に対して設置する。
2. 基礎的・総合的な選択必修科目として、「哲学概論」、「西洋哲学倫理学史」、「論理学入門」を設置する。
3. 専門的な選択必修科目として、「科学の哲学」、「中級論理学」、「現代論理学の諸問題」、「知識の哲学」、「形而上学」、「心の哲学」、「言語の哲学」、「現象学」、「宗教の哲学」を設置する。
4. 3・4年次に各教員の専門的指導の下に卒業論文の執筆と完成に取り組むための「哲学研究会」（ゼミナール）を設置する。この際、複数の研究会に所属し、領域横断的な研究をおこなうこともできる。

【倫理学専攻】

卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

倫理学専攻は、古今東西の思想家たちとの対話を通じて人間の生き方を探究すること、思想家の精神的創作活動の場としての文化の本質を問うこと、そして、近現代の自然観や生命観、人間観や社会観を問い直すことを理念としてかけ、これらの理念にもとづいてカリキュラムを編成し、教育を実施している。

倫理学専攻は、所定の単位を修得し、卒業論文を執筆・提出し合格した学生に対し、下記の能力があるものと認め、学士（哲学）の学位を授与する。

1. 人間の生き方を探究する視点と方法を確立するために必要とされる、倫理学の主要理論に関する基本的な知識を習得している。

2. 倫理学の主要文献を原語で正確に読解するために必要なレベルの外国語（原則として独・仏・英）を習得している。
3. 多様な倫理思想・宗教思想についての理解を深め、人間の根底に迫るとともに、多文化社会における人間の生のあり方を反省することができる。
4. 科学技術の発展や環境破壊、戦争、グローバル化など、現代社会の身近な問題を手がかりにして、近現代の自然観や生命観、人間観や社会観を問い直すことができる。
5. 倫理学上重要な理論とそれに関する先端的研究について、一定の知識を有している。
6. 人間の生き方や社会のあり方について考察すべき問いを自らの関心に従って選択し、それに対する解答を首尾一貫して提示することができる。

学修の最終成果である卒業論文（卒業試験）は次の審査項目を満たすものとする。

1. テーマ・問題意識が明確である。
2. 先行研究を踏まえている。
3. 方法が目的に適っている。
4. 内容が論理的で一貫している。
5. 形式が学術論文として適切である。

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

倫理学専攻は、ディプロマ・ポリシーの達成を目的として、以下に示すカリキュラムを編成し実施する。

1. 倫理学の主要理論と理論史に関する基本的な知識を習得するための科目として、「倫理学概論」「西洋哲学倫理学史」（2 年次履修指定科目）を必修科目として設置する。
2. 倫理学の主要文献を原語で読解するための科目として、「哲学倫理学原典講読（独・仏）」（第 2 学年進級条件科目）を必修科目として設置する。より発展的な学習のため、「倫理学洋書講読」を設置する。
3. 多様な倫理思想・宗教思想の理解を深めるための科目として、「日本倫理思想」、「東洋 倫理思想」、「キリスト教概論」を設置する。学生は、以上の 3 科目と「仏教学概論」（全専攻共通科目）のうち 1 つを必修科目として履修しなければならない。
4. 現代社会の身近な問題を手がかりにして近現代の自然観や生命観、人間観や社会観を問い直すための科目として、「倫理学の課題」を必修科目として設置する。
5. 倫理学上重要な諸理論を詳細にわたって理解し、その先端的研究に触れるための科目として、「哲学倫理学特殊」を設置する。

卒業論文を執筆するために、「倫理学研究会」（第 3 学年進級条件科目、4 年次履修指定科目）を必修科目として設置する。学生は自らの関心に従って研究テーマを選択し、所属する研究会の担当教員による指導を受けることができる。ただし、原則として 2 年間同一教員の研究会に所属しなければならない。

【美学美術史学専攻】

卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

美学美術史学専攻では、卒業時に学部生が身につけるべき能力として下記のことを定める。学則に定める卒業要件を満たした上で、卒業論文の内容・形式が学問的に適正と認められた者を、これらの能力を身につけた者と認め、学士（美学）の学位を与える。

1. 各研究会での研究・発表等の活動に積極的に参加し、適確な文章をもって、学問的な評価に耐えうる卒業論文を執筆できる。またそのために、研究テーマに応じて適切な情報の収集と分析を行い、科学的・論理的に思考し、批判的に考えることができる。
2. 美学、芸術学、美術史学、音楽学、アート・マネジメント等、美と芸術に関する各分野の学問に関して、本質的で幅広い知識と教養を身につける。
3. 芸術の諸分野についての基礎的教養を身につけ、あわせてイメージやパフォーマンス等の非言語的対象を把握し、それを適切に言語化する基本的リテラシーを身につける。
4. 美学や各芸術分野についての文献講読を通して、基本的な外国語・日本語（古典）の読解力を身につける。

以上の能力を身につけることにより、優れたコミュニケーション能力を有し、人間を尊重し、自らと他者を理解することによって多様な価値を認める深い人間性を養う。これにより、さまざまな分野でリーダーシップを発揮し、社会の各方面に貢献できる人材となる。

学修の最終成果である卒業論文（卒業試験）は次の審査項目を満たすものとする。

1. テーマ・問題意識が明確である。
2. 先行研究を踏まえている。
3. 方法が目的に適っている。
4. 内容が論理的で一貫している。
5. 形式が学術論文として適切である。

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

美学美術史学専攻では、ディプロマ・ポリシーの達成を目的として以下のカリキュラムを編成する。

1. 第3、第4学年の学生は、必ず「美学美術史学研究会」を履修し、同研究会の担当教員の下で研究・発表を行い、4年生は卒業論文を執筆する。
2. 美学や芸術学、芸術の諸分野、そしてアート・マネジメントに関する概説と各論等、多様な授業を設置する。
3. 芸術の諸分野についての十分な学問的アプローチを可能にするため、外国語（英語・第2外国語）・日本語（古典）のリテラシーを重視し、「原典講読」を設置する。
4. 主に第2学年を対象に、「芸術研究基礎」と「美学美術史学演習」を設置する。これらの科目においては、芸術の諸分野について学ぶことを前提に、レポートの書き方などの基本的なアカデミック・スキルズ、基本文献や方法論、資料の扱い方など、関連する研究を進めるために必要な各種の導入教育を行う。
5. 「学芸員資格取得に必要な科目」の一部を、専攻の科目として設置する。

【日本史学専攻】

卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

日本史学専攻では、卒業時に学生が身につけるべき能力として下記のことを定め、学則に従って卒業要件を満たし、卒業論文審査に合格した学生についてはこの能力を身につけた者と認め、学士（史学）の学位を与える。

1. 歴史学を中心として広く様々な分野に即して学問の方法を学びつつ、特に日本史学の分野において、通時代的な歴史像の把握の下に研究領域全般に関する知識を修得し、古文書などの史料から歴史情報を引き出すための史料批判・読解などの基礎的能力を具えるとともに、引き出した歴史情報を分析して新たな史実を実証的に掘り起こし、その成果を論理的に構成して発表することができる。
2. 日本史学もしくはその関連分野の研究を内容とする日本語の卒業論文を執筆し、さらに卒業論文のテーマに関連する領域については包括的な専門知識を有し、その領域の研究に貢献をすることができる。
3. 生のデータの信頼性を確認した上で、それらを分析して論理的妥当性が認められる推論を導き出し、万人の納得を得られるような形でまとめて発表する基礎的な能力を身につけるとともに、日本の歴史に対する理解を通じて養った、人間の営みと社

会の動きに対する一定の視野と洞察力をあわせもつことで、基礎的なリテラシーを
具えた社会人、研究者、教育者として、社会に対する独自の貢献ができる。

学修の最終成果である卒業論文（卒業試験）は次の審査項目を満たすものとする。

1. テーマ・問題意識が明確である。
2. 先行研究を踏まえている。
3. 史料の取り扱いが適切であり、方法が目的に適っている。
4. 内容が論理的で一貫している。
5. 形式が学術論文として適切である。

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

日本史学専攻では、ディプロマ・ポリシーの達成を目的として以下のカリキュラムを編成
する。

1. 日本史の全体像を捉えるために「日本史概説」を、個別の時代やテーマに関する理
解を深めるために「日本史特殊」を開講する。古代～近代の史料読解の基本をレク
チャーする「日本史史料講読」、幅広く各時代の史料に関する基礎知識を講義する
「古文書学」、専門とする時代の史料を読み解く能力を磨く「日本史演習」、論文執
筆の能力を養う「日本史研究会」を設置する。また、歴史学の学問体系について学
ぶために「史学概論」を置き、日本史以外の歴史学の学問的方法を体験するために
「東洋史概説」「西洋史概説」「考古学」「民族学」から所定の単位を選択必修とする。
広く様々な分野の学問体系に触れるため、30単位以上の選択科目の履修を求める。
2. 日本史学に関する包括的な知識と基礎的な能力を修得し、社会人としての基礎的な
リテラシーを身につけたことを確認するため、「卒業試験（卒業論文）」を課す。

【東洋史学専攻】

卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

卒業には東洋史学専攻の専門教育科目における第 2・3・4 学年の進級条件科目・卒業
条件科目を適切に履修し、単位を修得することが求められる。所定の要件を満たしたと認
められる学生に学士（史学）の学位を授与する。卒業試験は卒業論文によって行われる。
卒業論文では、独創的かつ適切なテーマを自らが主体的に設定したうえで、学術的な研究
文献や一次資料を積極的に読み解き、論理的かつ多面的な考察を重ね、それらを論文とし

て表現することのできる能力が重視される。東洋史学専攻での学習をととして、東洋史学に関する学術的・専門的な事柄や能力に留まらず、日本社会や国際社会における政治・経済・社会・文化を歴史的・多面的に捉え、人々の多様な価値観を認識し理解する力を養う。さらには社会や自身の現状における問題や課題を見出し、その解決に向けて努力し続ける力を身につける。また在学中に培った外国語の能力を活かし、アジアを始めとする国際社会で活躍したり、国際交流の分野で貢献できる道も開かれている。

学修の最終成果である卒業論文（卒業試験）は次の審査項目を満たすものとする。

1. テーマ・問題意識が明確である。
2. 研究文献や一次資料を踏まえている。
3. 方法が目的に適っている。
4. 内容が論理的で一貫している。
5. 形式が学術論文として適切である。

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

第2学年においては専門教育科目である「東洋史研究入門」、「東洋史概説」、「東洋史特殊」、「東洋史講読」の各科目を履修し、東洋史の専門的な学習に不可欠である基礎的知識や資料の収集・読解の技術、国際的な視点や幅広い学問分野の教養を身につける。また第1学年に引き続き必修語学科目を履修し、外国語力を養う。第3・4学年においては「東洋史研究会」（ゼミナール）や「東洋史演習」などでの資料講読や研究発表、教員・学生間の議論をととして専攻する地域・時代を定め、外国語資料の読解力を向上させながら、当該地域の政治・経済・社会・文化や国際関係について歴史的・総合的な理解を深める。さらに研究発表に必要なプレゼンテーションや論文執筆のスキルを習得する。以上の学習を踏まえ、卒業試験である卒業論文の作成は、担当教員の指導や助言を受けつつ、学生個人が主体的・積極的に進める。提出された卒業論文は担当教員を中心に複数の教員が審査をする。

【西洋史学専攻】

卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

西洋史学専攻では、西洋世界およびそこから強く影響を受けた地域の過去を学ぶことを通して、現代の「国際社会」の多くの側面を構成する「価値観」を理解するために十分な知識を獲得し、ひいては歴史学を通して現代社会の深層を見つめる知見と能力を得ることを

到達目標としてカリキュラムを編成している。学則に定める単位を修得し卒業試験に合格した者は、上記の目標を達成したとみなし、学士（史学）の学位を授与する。

学修の最終成果である卒業論文（卒業試験）は次の審査項目を満たすものとする。

1. テーマ・問題意識が明確である。
2. 先行研究を踏まえている。
3. 方法が目的に適っている。
4. 内容が論理的で一貫している。
5. 形式が学術論文として適切である。

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

西洋史学専攻では、古代から現代までのヨーロッパやアメリカなどいわゆる西洋世界、およびそこから強く影響を受けた地域の過去を学ぶことを通して、現代の「国際社会」の多くの側面を構成する「価値観」を理解するために十分な知識を獲得すること、そのために自ら主体的に情報を収集し、それを学問的に分析するために必要な外国語能力と学問の方法論を身につけること、また歴史学を通して現代社会を見つめる多角的な視点を得ることを目的として、下記のようなカリキュラムを編成している。

1. 西洋世界の過去についての概説的な知識を得るために、必修科目として「西洋史概説Ⅰ～Ⅵ」の全てを履修し、また選択必修科目「西洋史特殊 (A)～(J)Ⅰ・Ⅱ」の履修を通して、その中にある多様性や多重性への理解を深める。
2. 外国語については、学部の定める必修語学の授業に加えて、第2学年の進級条件科目である「原典講読Ⅰ・Ⅱ」において、英語で西洋史学の学術文献を講読する力を習得し、さらに第3学年の進級条件科目である「西洋史演習Ⅰ・Ⅱ」において、英語以外のヨーロッパ言語（ドイツ語・フランス語・スペイン語・イタリア語・ロシア語）のいずれかで文献を講読する力を習得する。
3. 第2学年での履修が奨励される必修の講義科目「史学概論Ⅰ・Ⅱ」を通して、歴史学の理論と方法論の基礎を学び、歴史学そのものについて考える機会を持つ。また、選択必修科目である「日本史概説」および「東洋史概説」の履修を通して、より広い文脈の中での歴史への理解を深める。
4. これらの概説的な講義科目や外国語演習科目で得た知識や能力を基礎として、さらに特定の地域・時代を専門的に研究し、学問研究の方法を実践的に学ぶために、第3学年と第4学年の中心科目として「西洋史研究会Ⅰ～Ⅳ」（いわゆるゼミ）を履修する。
5. セミナー形式の討論や定期的なレポートの添削など、担当教員によるきめ細やかな

個人指導を受けながら、3年間の専攻領域での勉強の集大成として卒業論文を作成する。

6. 歴史学が人間の生の全ての面を対象とする学問であることを鑑みて、大学設置の全ての専門科目が専門選択科目単位として認められているので、専攻領域の必修科目を中心としながらも、各自が興味と関心に合わせて自らの学際空間を設計することが可能である。

【民族学考古学専攻】

卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

民族学考古学専攻では、卒業時に学生が身につけるべき能力として下記のことを定め、学則に従って卒業要件を満たし、卒業論文審査に合格した学生についてはこの能力を身に着けたものと認め、学士（史学）の学位を与えることとする。

1. 民族学、考古学、あるいは関連分野に関する基礎的知識や必要とされる語学・分析方法を習得している。
2. 個別の研究フィールドにおいて専門性の高い調査研究を展開し、その成果を卒業論文の執筆・発表などを通して論理的・効果的にプレゼンテーションできる能力を有している。
3. 上記1、2に示した能力を基礎として、大学卒業後の実社会の生活において、自ら能動的に問題を発見・分析・解決する実践的能力を有している。

学修の最終成果である卒業論文（卒業試験）は次の審査項目を満たすものとする。

1. テーマ・問題意識が明確である。
2. 先行研究を踏まえている。
3. フィールドワークも含めて、その研究方法が目的に適っている。
4. 内容が論理的で一貫している。
5. 形式が学術論文として適切である。

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

民族学・考古学専攻では、ディプロマ・ポリシーの達成を目的として以下のカリキュラムを編成する。

1. 民族学と考古学の基礎的な考え方を習得するための概論科目（「考古学」・「民族学」）を設置するとともに、研究を展開する上で必要な専門知識の習得を目的に、学生の求めに応じた幅広い時代・地域を対象とした専門性の高い特殊講義科目群（「民族学考古学考特殊」）や語学科目（「原典講読」）を設置する。
2. フィールドでの調査研究能力、一次資料の分析能力、分析結果のプレゼンテーション能力を高めることを目的に、各種実習科目群（「民族学考古学考研究法」・「博物館学実習」）を設置するとともに、教員によって組織される国内外の野外調査等への参加を推奨する。
3. より高いレベルで考古学的・民族学的思考力や論理構成力を養成し、加えて卒業論文の執筆を可能とするために、指定された指導教員が個別指導を行う演習科目群（「民族学考古学研究会」）を設置する。

【国文学専攻】

卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

国文学専攻では、課程修了時に学生が身につけるべき能力として下記のものを定め、学則に従って修了要件を満たし、卒業論文審査に合格した学生についてはこの能力を身につけた者と認め、学士（文学）の学位を与える。

1. 国文学および日本語学を中心に、学芸、習俗など広く日本文化の歴史と現在について専門知識を有し、厳密な研究方法を身につけている。
2. 上記1で身につけた知識・方法の上に立ち、自らの問題意識に基づいてテーマを設定し、独力でデータ・資料を収集し、オリジナルな分析・考察を行って課題を解決し、その成果を論理的・説得的に構成して自分のことばで発表できる。
3. 上記2の集大成として、独力で卒業論文を執筆できる。
4. 国文学・日本語学・日本文化を専門的に学び深く理解することを通して、それらと対照して異文化についても広く深く理解する視野をもつとともに、固定観念や偏見にとらわれず国文学・日本語・日本文化をも相対化してとらえることのできる能力を培っている。
5. 大学で獲た知識や研究技法を基礎にして生涯、学習を継続する姿勢を保つとともに、それらの知識・技法を社会に出た後から直面する多様な問題・課題を解決するために応用できる能力をもち、自立した責任ある社会人として社会に貢献できる。

学修の最終成果である卒業論文（卒業試験）は次の審査項目を満たすものとする。

1. テーマ・問題意識が明確でかつ独自性がある。
2. 先行研究を踏まえている。
3. データ・資料を適切に読解・分析している。
4. 内容が論理的で一貫している。
5. 形式が学術論文として適切である。

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

国文学専攻では、ディプロマ・ポリシーの達成を目的として、以下のカリキュラムを編成する。

1. 国文学ならびに日本語学、漢文学の諸分野にわたって広範囲に講義科目群を設置するとともに、日本語教育学、書誌学（斯道文庫設置講座）等の関連科目をも開講することで、国文学・日本語学を基軸とした日本文化に関する広範な専門知識を培う。また、「国文学原典講読」を必修の少人数科目として設置し、本文読解能力（古典文法、古典語彙のほか変体仮名読解等の能力を養成）、資料・データ収集技能、分析・考察力、構成力、プレゼンテーション能力を養成する。
2. 演習科目を複数履修させることで、国文学ならびに日本語学のさまざまな分野の研究技法を具体的に体験させ習熟をはかるとともに、論理的・批判的思考の訓練をおこなう。さらに、自立的かつ自律的に研究にむかう姿勢の重要性に気付かせ、独力で問題を解決しうる能力を涵養する。
3. 卒業論文の執筆を可能とするため、指導教員の「研究会」に分属し、問題発見能力、高度な調査能力および論述能力を養うとともに、研究テーマについての知識を深め、あわせて指導教員から個別に論文指導を受けて、卒業論文を独力で完成させる。
4. それを専門に扱う科目はもうけていないが、自国文化の深い理解が高度な異文化理解につながることを理解させるよう、各科目のなかに比較・対照的観点を取り入れることに努めている。

【中国文学専攻】

卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

中国文学専攻は、中国語文化圏への探求を基礎として多文化環境への理解を深め、国際社会への適応力と発信力を備えた有為の人材を育成することを目的とする。「中国語学」「中国現代文学」「中国古典文学」を研究教育の3つの柱として、歴史・哲学・社会・文化などを含めた幅広い領域を対象とし、古代から現代にいたる通時的な視野と、各国・各地域

にまたがる共時的な視野のもとで、高い専門性を有しつつ複合的に中国語文化圏の諸相を研究できる能力の習得を目指す。本専攻は、所定の課程を修了することで、以下の能力を習得したと認められた者に対して学士（文学）の学位を授与する。

1. 日本語・中国語の運用能力を含む実践的な語学力。
2. 学問・研究の基礎を固め、主体的に学ぶ能力。
3. 自他に対する批判的思考力を伴う論理的な説明能力。
4. 多文化環境に適応する幅広い知識と柔軟な発信能力。

学修の最終成果である卒業論文（卒業試験）は次の審査項目を満たすものとする。

1. テーマ・問題意識が明確である。
2. 先行研究を踏まえている。
3. 方法が目的に適っている。
4. 内容が論理的で一貫している。
5. 形式が学術論文として適切である。

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

中国文学専攻では、「卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」に定められた能力の習得のために、下記のカリキュラムに基づき語学力と研究能力を向上させる。

1. 中国語の語学力向上

1年次に習得した中国語の語学力に基づき、2年次以降、中級・上級・最上級の各種レベルの必修語学科目を履修し、読解・会話・作文の各分野にまたがる総合的な運用能力の向上を目指す。

2. 広汎かつ専門的な知識の習得

2年次には必修の専門科目「中国語学概論」「中国現代文学史」「中国古典文学史」を軸として基本的な知識を習得する。その基礎のうえに、3・4年次には「中国文学特殊」「中国語学特殊」「中国文化特殊」の科目により、より専門性の高い知識の習得を目指す。

3. 研究能力の向上

2年次から4年次まで、選択必修科目「中国語学・中国文学演習」により、現代中国語および古典文献の精読を行い、実践的な語学力を伴う研究能力の向上をはかる。

4. 卒業論文執筆

3年次から4年次にかけて、各自の関心に応じて「中国語学・中国文学研究会」に

所属し、指導教員の指導を仰ぎ卒業論文を執筆する。情報検索、資料収集、批判的思考力を伴う先行研究の分析、論理的な考察、および効果的な文章記述の能力を習得し、問題点を発見して主体的に解決し、その成果を発信することを学ぶ。

【英米文学専攻】

卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

英米文学専攻では、卒業時に学生が身につけるべき能力として下記のことを定め、これを達成するためのカリキュラムを編成する。学則に従って卒業条件を満たした学生についてはこれらの能力を身につけた者と認め、学士（文学）の学位を与える。

1. 母語を使用して、正確な読解と適切な調査に基づいた論理的な思考を展開し、他者と生産的な議論を行うことができる。
2. 外国語（英語）を使用して、母語に準ずる正確な読解・論理的思考・生産的な議論を行うことができる。
3. 英語という言葉それ自体に対する関心・理解を深め、過去から現在に至る英語を使用した文化の特徴・歴史に関する知識を身につける。
4. 英語を通じて異文化の他者と交流を持ち、共通の問題を解決していくための議論や実践に備えた基礎能力を培う。

学修の最終成果である卒業論文（卒業試験）は次の審査項目を満たすものとする。

1. テーマ・問題意識が明確である。
2. 先行研究を踏まえている。
3. 方法が目的に適っている。
4. 内容が論理的で一貫している。
5. 形式が学術論文として適切である。

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

英米文学専攻では、ディプロマ・ポリシーの達成を目的として以下のカリキュラムを編成する。

1. 母語ならびに外国語（英語）を用いた読解力・思考力・議論構成力を養成するため、少人数の演習科目（2年次以降）および研究会（ゼミナール・3年次以降）を設置

する。特に研究会では卒業論文研究・執筆指導を中心として、個々の学生が主体的に問題を発見し解決する能力を養う。

2. 英語による高度な議論の能力を身につけるため、1年次・2年次には各自の運用能力ごとにクラス編成された英語科目の履修を勧めるとともに、2年次には少人数の英語英米文学基礎講読を必修とし、専門的な議論に移行する準備として原典で文学作品や論説文を読解する訓練を行う。また卒業論文研究にあたっては英語の一次資料・二次資料を用いることを原則とし、より専門的な読解力を養う。加えて、卒業論文執筆は英語によるものと定め、英語による論理的な議論構成力および豊かな表現力を培う。
3. 英語ならびに英語圏文化に関する幅広い知識を身につけるため、2年次以降、現代英語学（言語学）・英語史・英文学史・米文学史・古代中世英語学・英語音声学を必修とする。
4. 学生の他者との交流・議論の場を設けるため、研究会での発表・討論を課するとともに、慶應義塾大学国際センターなどを通じた短期・長期の海外留学を推奨する。

【独文学専攻】

卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

独文学専攻では、学士課程修了時に身につけるべき能力として下記のことを定め、学則に従って卒業要件を満たし、卒業論文審査に合格した学生についてはこの能力を身につけた者と認め、学士（文学）の学位を与える。

1. 文法構造の理解と基本的な語彙の習得を基盤に、四技能（読み、書き、聴き、話す）のバランスがとれたドイツ語運用能力を身につけ、これを通じてドイツ語母語話者との活発な異文化コミュニケーションを実践することで、異文化の深い理解ならびに自文化の積極的発信をおこなうことができる。
2. ドイツ語および日本語による関連文献を通じて、ドイツ語学・文学研究ならびにドイツ語圏の文化現象全般に関する総合的知識を獲得し、この知識を基盤に当該領域に関する問題を発見・設定し、その解決に至る思考の過程を日本語またはドイツ語で論理的に記述した卒業論文を作成することができる。
3. ドイツ語固有の論理構造およびドイツ語文化圏の歴史的、文化的特性を理解することによって、日本語および日本文化を相対化する視点を獲得し、自文化に関する反省的思考を深め、これを通じて得られた異文化リテラシーを生かし、社会人として国際社会に貢献できる。

学修の最終成果である卒業論文（卒業試験）は次の審査項目を満たすものとする。

1. テーマ・問題意識が明確である。
2. 先行研究を踏まえている。
3. 方法が目的に適っている。
4. 内容が論理的で一貫している。
5. 形式が学術論文として適切である。

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

独文学専攻では、ディプロマ・ポリシーの達成を目的として以下のカリキュラムを編成する。

1. ドイツ語運用能力の育成に当たっては、総合教育課程と専門教育課程を通じ、以下の一貫したカリキュラムが組まれている。学部入学者は第1学年・第2学年を通じ、原則として外国語2語種を必修外国語科目として履修する。このうちドイツ語履修者は基礎的言語運用能力を体得するため、第1学年週3回、第2学年週2回ドイツ語の授業を受講する。その際、第1学年の週3回授業のうち1回は必ずドイツ語母語話者がこれを担当することになっている。この2年間の課程で修得した言語運用能力は、各専攻における専門文献読解等の専門的学修ならびに異文化コミュニケーションの手段として活用される。独文学専攻の専門教育課程においては、上記文学部共通語学カリキュラムを通じて獲得された技能をさらに発展させ、より高度な言語運用能力を養成するため、第2学年以降、「読解」、「文章作成」、「聴解・口頭表現」にそれぞれ重点を置いた科目群をレベル別に多数設置している。すべて少人数による演習形式の授業であり、かつドイツ語母語話者の担当率も高い。これらの科目を段階的に継続して学修することにより、言語運用の四技能がバランス良く修得できるよう配慮している。
2. ドイツ語学、ドイツ文学、ドイツ文化学の領域に関しても、3年間の専門教育課程を通じ、段階的に専門的知識を深めることができるようカリキュラム設計をおこなっている。第2学年においては、ドイツ文学史の概括的知識や文学テキスト読解のストラテジー、あるいはドイツ語学・文学・文化研究のアカデミック・リテラシーを修得する科目群を配置し、第3学年・第4学年においては、ドイツ言語学、中世ドイツ文学・文化、近代・現代ドイツ文学、近代・現代ドイツ文化、近・現代ドイツ思想、ドイツ演劇学、メディア学等に関する多彩な科目群を、講義形式・演習形式共に多数設置し、学生が個々の関心ないし問題意識に応じて学修を設計できるよう配慮している。また、これら専門の講義科目・演習科目の一部をドイツ語母語話者である専任教員・有期教員・非常勤教員の担当とすることで、ドイツ語によるプ

レゼンテーションや議論の実践的学習を可能としており、ドイツ語圏の大学への留学を希望する学生にとって格好の訓練の場となっている。

3. 専門教育課程における学修の成果を卒業論文の形で結実させるため、第3学年・第4学年に研究会を設置する。学生は第3学年において複数の研究会を履修し、第4学年においてはそのなかから、卒業論文指導教員担当の研究会を選び、引き続き履修する。これにより、学生は卒論指導教員の同科目を4学期継続して履修しつつ、卒業論文の構想から完成に至るまでの指導を受けることになる。
4. 異なる環境を通じて高度な異文化リテラシーを身につけるために、慶應義塾大学国際センターによって提供される留学プログラム、さらには学内外の各種留学制度などを活用した海外の大学への短期（1年間）留学を推奨する。海外の大学への正規留学によって取得した単位を、単位数を限って卒業要件に含めることを認める。
5. 海外への留学をはじめとし、より柔軟な履修をおこなえるように、全ての科目は半期科目として開講し、また留学期間を慶應義塾大学文学部在籍期間に算入することによって、留学期間を含めて4年間で学士課程を修了できるよう配慮している。
6. ドイツ語学・文学、ドイツ文化に限定されぬ、広い領域の知識と教養を身につけることができるよう、慶應義塾大学文学部設置全専攻共通科目、他専攻設置専門教育科目、また本塾大学の他学部および附属研究所の設置科目を卒業要件として履修することを、単位数を限って認める。

【仏文学専攻】

卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

文学部のみならず、さまざまな学部を横断する総合教育科目を通じて広い教養を培うと同時に、厳密に構築され、ティーム・ティーチングを徹底させた語学科目や、専攻が提供する多様な演習科目によってフランス語の高度な運用能力を獲得することが、卒業のための大前提となる。同時に専門教育科目については、仏文学専攻内にとどまらず、他専攻、他学部の開講科目も広く卒業単位として認定しているが、これは学生一人ひとりが卒業に向けて自分で考え、進むべき道を自ら切り拓いていくよう促すためである。

当専攻の専門課程を修了した学生が身に着けるべき能力は二つに大別することができる。一つはフランス語圏諸国で活躍するに足るだけの語学力であり、いま一つは国際人として異文化を理解するための人文的教養および洞察力の獲得である。そのような能力を鍛えるための実習であると同時に、その能力の獲得証明でもある卒業論文は、専攻の学生全員が取り組まなければならない必修の課題である。少人数ゼミの形式で開講される「フランス語学文学研究会」に参加し、ゼミ担当教員の指導の下で研究テーマを掘り下げ、論文を完

成させることは、自分の視界や世界が大きく広がっていく経験であり、学生一人ひとりが自立への道を歩み始める点で何ものにも代えがたい学生生活の総決算となるであろう。

以上の方針にもとづく要件を満たしたと認められる学生に、学士（文学）の学位を授与する。

学修の最終成果である卒業論文（卒業試験）は次の審査項目を満たすものとする。

1. テーマ・問題意識が明確である。
2. 先行研究を踏まえている。
3. 方法が目的に適っている。
4. 内容が論理的で一貫している。
5. 形式が学術論文として適切である。

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

仏文学専攻では、フランス語およびフランス文化を通じて、学生諸君が社会的・文化的事象を多角的にとらえる能力と、高度で実践的な語学力を身に着けることを目指し、目標達成のために効果的なカリキュラムを提供する。専門科目は基礎コースと専門コースに分かれ、2年次の学生を対象とした基礎コースでは徹底した少人数授業によって語学力の向上を目指す一方、フランス文化全般を対象とした講義科目によって、個々の学生が関心分野と出会う手助けをする。専門コースでは、基礎コースの学修成果を踏まえ、「フランス語学演習」と「フランス語表現演習」で語学力のさらなる向上を図るとともに、近世から現代にいたるフランスおよびフランス語圏の文化を視野に入れ、狭義の文学を超えた文化全般の研究に取り組む。

一方通行になりがちだった旧来の語学教授法を廃して、少人数授業を展開するのも、語学学習の総仕上げとして海外留学の機会を広く提供しているのも、上記の目標達成を確実にするためであり、頻繁な小テストや課題の提出を学生に義務づけ、その内容について教員がコメントすることで、学習成果の把握と、きめ細かな指導が可能となる体制を築いた。当専攻では専門課程3年間の総仕上げとして卒業論文の執筆を4年生全員に課しているが、専門分野が多岐にわたる専任スタッフの知見を生かし、各分野の先端的な研究成果に触れてもらうため、常時 7～8 の研究会（少人数ゼミ）を展開して、学生の多様な関心に対応できる態勢を整えている。また、基礎コースと専門コースの区別は、フランス語圏諸国からの帰国生や、大学入学以前にフランス語の学習歴がある者についてはこれを柔軟に運用し、2年次から専門コースの履修を認めることで在学生の多様性を尊重している点も当専攻の特徴として、ここで是非とも強調しておきたいと思う。

【図書館・情報学専攻】

卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

学士（図書館・情報学）の学位を、以下のような資質と能力を有する者に授与する。

個人や機関、団体などにより、生産され記録された経験や情報、知識について、その流通・組織化・提供・利用・保存・制度など諸側面の基礎的な知識の学修を通じて、情報の視点から問題を発見し自ら解決できる総合的な能力の習得をめざす。

そのため、特に次のような資質形成と能力開発により、社会のさまざまな場面で幅広く活躍できる人材を育成する。

- ・ 特定テーマから広範な分野にいたるまで文献と情報を検索、収集、分析する能力
- ・ コンピュータをはじめ情報機器・情報メディアを活用する情報処理能力
- ・ 図書館司書としての基礎的資質と情報専門職としての基盤形成
- ・ 日本語と英語による専門文献の読解能力
- ・ 効果的なプレゼンテーション能力および論理的な文章表現能力

学修の最終成果である卒業論文（卒業試験）は次の審査項目を満たすものとする。

1. テーマ・問題意識が明確である。
2. 先行研究を踏まえている。
3. 方法が目的に適っている。
4. 内容が論理的で一貫している。
5. 形式が学術論文として適切である。

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に定めた総合的な能力の習得を図るために、以下に示す教育課程を編成し実施する。

- ・ 第2学年では、図書館・情報学の基礎的内容を取り上げた必修科目群の講義および演習を履修することで、図書館・情報学の基礎を広く学修するとともに、領域の広がりを理解し、第3学年以降のコース別の学修への方向づけを行う。
- ・ 第3学年からは、下記の3つのコースのいずれかに属し、コースごとの必修科目、

指定選択科目および選択科目を履修することで、専門領域の基礎的知識の習得を図る。

図書館コース

図書館や情報提供機関のサービスと運営を中心に、図書館司書等に必要とされる、社会において知識と情報を活用するための仕組みについて学修する。

情報メディアコース

情報メディアの社会的制度、技術特性、人間の認知を踏まえながら、情報メディアが社会で果たす役割について学修する。

情報管理コース

情報処理、情報管理などの諸活動および情報サービスに必要不可欠な情報検索と情報組織化の基本的な考え方と技術について学修する。

- ・ 図書館・情報学専攻以外が設置する専門教育科目の履修を通して、幅広い視野と知識の習得を図る。
- ・ 指定された科目を履修することにより、司書資格を取得できるよう科目を配置する。
- ・ 第3学年から第4学年にかけて全員が研究会に所属する。研究会の担当教員の指導のもと、課題設定から課題解決、さらに成果のまとめや報告までを含めた卒業研究を課す。卒業研究は、中間発表や最終発表を含めて、複数教員による審査および審査項目の標準化などの指導体制のもとで実施することにより、総合的な能力の育成を図る。

【社会学専攻】

卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

社会学専攻は、社会学および社会心理学、文化人類学の知識と方法ならびに問題意識を統合的に活用し、自立した市民および職業人として個人と社会のために協働できる人材の育成を目指し、以下のような卒業認定・学位授与の方針を定め、所定の要件を満たしたと認められるものに学士（人間関係学）の学位を授与する。

1. 社会学、社会心理学、文化人類学における主要な学説についての基礎的な理解ができていること。
2. 社会学、社会心理学、文化人類学のそれぞれの視点から、さらにはそれらを融合した視点から、人間、社会、文化にかかわる諸事象を捉え、分析し、説明する学問的成果を理解していること。
3. 質的・量的社会調査の方法を理解し、複数の方法を用いて資料の収集・整理・分析・解釈ができること。

4. 以上のような知識に加え、卒業論文コースの学生は、人間、社会、文化にかかわる諸事象の様々な側面を探究し、その探究の過程と結果について適切に表現することができること、卒業試験コースの学生は、社会学、社会心理学、文化人類学の学問的成果について、定められた一定基準以上の知識および活用能力を身につけていること。

学修の最終成果である卒業論文（卒業試験）は次の審査項目を満たすものとする。

卒業論文コース

1. テーマ・問題意識が明確である。
2. 先行研究を踏まえている。
3. 方法が目的に適っている。
4. 内容が論理的で一貫している。
5. 形式が学術論文として適切である。

卒業試験コース

1. 社会学、社会心理学、文化人類学の学問的成果について、定められた一定基準以上の知識および活用能力を身につけていること。
2. 与えられたテーマに関して、社会学、社会心理学、文化人類学の知識をもとに、論理的に表現できること。

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

社会学専攻は、以下のような方針に基づき、教育課程を編成・実施する。

1. 社会学、社会心理学、文化人類学における主要な学説についての基礎的な知識の習得を確実にするための科目を置き、3年次以降の学習の基盤を形成させる。
2. 人間、社会、文化の諸事象に関する社会学、社会心理学、文化人類学からの学問的成果を修得するための幅広い科目を置き、3つの学問に対する個別的学習のみならず、2つ以上の学問分野の融合的な理解を導いていく。
3. 人間、社会、文化の諸事象に関する様々な資料を収集・整理・分析・解釈するための妥当で信頼できる方法および技法が学べる科目を置き、自ら立てた問いを実証的に探究できる力を育てる。
4. 卒業論文コースとして、3年次と4年次においては、より限定的な領域における具体的な問題をめぐり、対話的、実習的、実践的に学習できる演習科目を置き、卒業論文の作成を支援していく。また、卒業試験コースの学生に対しては、4年次において、特定の専門領域を自覚的に選び、それを自らの専門として主張できるよう、

一定基準以上の知識および活用能力を担保できる履修指導を行っていく。

【心理学専攻】

卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

心理学専攻では、心や行動を科学的に捉え、社会における人々の行動や反応を客観的に把握し、その背後にある原因や機構を深く理解することのできる人材の育成を目指している。1年次に総合教育科目として、人文科学系、社会科学系、自然科学系の各科目を網羅的に学び、人間の心を幅広い観点から捉える柔軟性を身につける。特に、心理学が含まれる自然科学系の科目の履修を通して、科学的視点による心や行動の捉え方、さまざまな現象の数値化、データ解析方法などの基礎について学ぶ。2～4年次には、専門教育として、主に実験心理学に関する諸分野における専門的な基礎知識を身に付ける。それらの実践・臨床応用的な視点を学ぶために、実験心理学以外の心理学関連科目の履修をも義務づけ、心をより俯瞰的な視野から捉えるスキルを修得する。グローバルな人材育成を目指し、国際的なジャーナルに掲載される論文を読み込む能力や、そこで必要とされる高い思考力を身につける。また、実践力の育成を目指し、データ解析に必要な統計的スキルを修得させる。さらに、4年次における卒業論文の作成を通して、社会において役立つ、計画を立案し管理、実行する方法を学び、文章表現力や構成力を育む。また、ゼミや発表会におけるディスカッションを通して高いレベルのプレゼンテーション能力を身につける。これらの全過程を通して、社会における人間行動を洞察する力と、さまざまな場面で生じうる心や行動の問題に対処するための素養をもつ人間を育成する。

以上の方針にもとづく要件を満たしたと認められる学生に学士（人間関係学）の学位を授与する。

学修の最終成果である卒業論文（卒業試験）は次の審査項目を満たすものとする。

1. テーマ・問題意識が明確である。
2. 先行研究を踏まえている。
3. 方法が実証的で目的に適っている。
4. 内容が論理的で一貫している。
5. 形式が学術論文として適切である。

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

1 年次には、総合教育科目を通して心理学の研究に必要とされる科学的視点の基礎を身につけ、語学科目を通して研究の遂行に必要とされる外国語の読解力や表現力の基礎を修得する。2 年次以降の3 年間は専門教育が中心であり、心や行動のさまざまな側面を幅広い観点から深く理解できる教育課程を編成している。

具体的には、知覚・行動・学習・認知・発達・生物・神経心理学などの諸領域を特に重点化し、2 年次には、各領域における基礎知識を身につける。加えて、英語で書かれた文献を読み込むテクニックを身につけるための「アカデミックリーディング」、データ解析能力の基礎の修得を目的とした「心理統計」、実験技法の基礎を学ぶ「心理学研究法」の各科目を必修科目として開設している。3 年次には、現代の心理学が今ある姿になった経緯を理解するための「心理学史」に加え、実験心理学のより高度な知識の修得と卒業研究に必要な実験的技法やデータ解析法の修得を目指した「心理学実験」を設置し、実践的な体験を通じた、より専門的なレベルの教育を実現している。また3 年次からは、研究会（ゼミ）に所属し、さらに専門的な知識を身につける。4 年次には、基本的に3 年次と同じ研究会に所属し、独自の研究テーマを設定し、自分自身の手で実験やデータ解析を実施し、卒業論文としてまとめる。これらの必修科目の他にも、言語・感性・感情・動物・臨床・障害・司法など、必修科目では補いきれない心理学領域の知識を身につけるための選択必修科目を複数設置し、総合的な知識と技術の修得を目指している。全体を通して、学生のニーズに柔軟に対応できるようなカリキュラムが実現されている。

【教育学専攻】

卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

本専攻では、「教育」という視座から人間と社会の諸問題を学問的に探究することのできる人物の育成に取り組んでいる。これからの社会の持続的発展を展望するには、「政治」や「経済」あるいは「文化」や「宗教」などとともに、「教育」という視座が極めて重要な役割を果たしていくと考えるからである。教育学専攻では、学校教育というフォーマルな教育に必ずしも限定されない空間、時間、人間の「教育」問題を問い直すことを理念として掲げ、これらの理念に基づいてカリキュラムを構成、教育を実施している。

本専攻において「学士（人間関係学）」を授与される学生は、以下のような資質と能力を有するものとする。

1. 教育に関する諸問題を多角的に探究するための基礎教養として、人文科学・社会科学・自然科学に関する基本的知識と、海外の様々な学問的知見に学ぶために必要な

語学力を身につけている。

2. 教育学の基礎に関する概括的知識とともに、教育学の主軸分野である教育哲学、教育史、比較教育学、教育心理学に関する基本的知識を獲得している。
3. 教育に関する諸問題を学問的に探究するための方法論（哲学や歴史学から自然科学の方法論に至る多彩なアプローチ）の基礎を身につけている。
4. ゼミナールでの共同研究や各自の卒業論文研究などを通して、「教育」という視座から考察すべき学問的問いを自らの関心に即して設定し、人間と社会の様々な問題の探究や解明を試みている。

学修の最終成果である卒業論文（卒業試験）は次の審査項目を満たすものとする。

1. テーマ・問題意識が明確であり、教育学上重要な問題について批判的に検討している。
2. 教育学上重要な主要理論、研究遂行に不可欠な先行研究を踏まえている。
3. 卒業論文の研究方法が、教育に関する諸問題を学問的に探究し、自身の設定した目的を達成するために適切かつ妥当である。
4. 卒業論文の内容が論理的で一貫している。
5. 論文の形式が学術論文として適切である。

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

教育学専攻は、ディプロマ・ポリシーの達成を目的として、以下に示すカリキュラムを編成し実施する。

1. 教育学の基礎理論に関する基本的な知識を習得するための科目として「教育学概論」（2 年次進級条件科目）、教育学の主要な学問領域を学修するための科目として「教育学史」（教育哲学分野）、「教育史」（教育史・思想史分野）、「比較教育学」（比較教育学分野）、「教育心理学概論」（教育心理学分野）を必修科目として設置する。
2. 教育学の学術文献を原語で理解するとともに、卒業研究を遂行するために必要な基礎的能力を養う導入科目として「教育学原典講読」（2 年次進級条件科目）を必修科目として設置する。
3. 教育学上重要な諸理論についてより専門的に理解し、先端的研究に触れるための科目として教育哲学、教育史、比較教育学、教育心理学の 4 分野に関わる「教育学特殊」を設置する。
4. 教育学研究に関するより専門的な方法論を学ぶための科目として、「教育研究法」及び「教育測定実験」（実験・調査・分析方法の修得）、「教育学文献研究」（日本語、英語、ドイツ語、フランス語による文献・史資料研究法の修得）を設置する。

5. 卒業論文を執筆するために、「教育学演習」及び「教育学研究会」（3・4年次履修指定科目）を必修科目として設置する。学生は自らの関心に従って研究テーマを設定し、所属する研究会（ゼミナール）の担当教員による指導を受けることができる。学生は原則として、2年間同一教員の研究会に所属しなければならない。

【人間科学専攻】

卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

本専攻では、心理学・社会心理学・社会学・文化人類学の知識および方法論を修得しながら、人間についての総合的・多元的な理解を行い、現代社会における人間・社会・文化に関するさまざまな問題を分析・解決できる人材を育成することを目的としている。そのために以下を学位取得の要件とする。

1. 心理学・社会心理学・社会学・文化人類学の理論と方法についての基礎知識を修得していること。
2. 人間行動についての定量的・行動科学的な分析と、定性的・質的な分析の両方を行う能力、それらの能力を用いて自分で具体的な問題を分析できる能力を修得していること。
3. 分析結果をわかりやすく他者に説明・提示し議論できるプレゼンテーション能力と、それらを文章化して表現できる論文作成能力を修得していること。

学修の最終成果である卒業論文（卒業試験）は次の審査項目を満たすものとする。

1. テーマ・問題意識が明確である。
2. 先行研究を踏まえている。
3. 方法が目的に適っている。
4. 内容が論理的で一貫している。
5. 形式が学術論文として適切である。

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

人間科学専攻ではディプロマ・ポリシーの達成を目的として以下のカリキュラムを編成する。

1. 2年次に「人間科学基礎（科学的方法、研究パラダイム、自己と他者）」と「人間

科学研究法基礎（実験、質的調査、量的調査）」の二つの必修科目を置く。これらは人間を多角的にとらえるための認識論と方法論の基礎となる科目であり、本専攻のカリキュラムの全体像を明らかにすると同時に、これ以降の専門教育科目の位置づけを与える。

2. 2年次にはこのほかに4つの基幹科目(卒業時までには修得が必要な必修科目、「人間科学諸領域Ⅰ（心、自己論、アイデンティティ）」、「諸領域Ⅱ（社会心理学、対人行動、対人相互作用）」、「諸領域Ⅲ（社会学、モデル、方法論）」、「諸領域Ⅳ（文化人類学、多文化共生、フィールドワーク）」）の履修を推奨している。これらの科目を通じて、心理学・社会心理学・社会学・文化人類学の理論と方法の基礎を学ぶ。
3. 2年次以降に履修可能な専門教育科目として「人間科学特殊」を置く。これらの科目を通じて専門的な知識を修得すると同時に、自らの関心を深化させることができる。なお、専門科目にはデータの収集と分析を演習形式で学ぶ「人間科学研究法」も設置されており、計量的なデータ分析の方法を実践的に学ぶことができる。また英文文献の読み方を演習形式で実践的に学ぶ「人間科学演習」も用意されている。
4. 3年次からは「人間科学研究会」（ゼミ）を履修することができる。学生は自分の関心にあわせてゼミを選択し、より専門的な学習を演習形式で続けながら、自分たちで問題を設定・分析し、結果を発表・議論するスキルを身に着けることができる。なお、履修の自由度を高めるためにゼミを選択しないことも可能としている。
5. 4年次には学習成果を総動員し、学生が自らの関心に基づいて研究論文の作成を行う。研究会に所属する学生は、教員の指導の下に「卒業論文」を作成する。3年次に研究会に属さなかった学生も、「卒業研究」という形で教員の指導の下に研究論文を作成することが求められる。